

インフルエンザの感染を防ぐために グループ職員を対象に勉強会

インフルエンザの流行を前に、達生堂グループ全職員を対象とした院内感染を防ぐための勉強会が11月20日、ニコキッチンで開かれました。総合内科の村田智史医師が講師となり、インフルエンザ自体の解説から感染経路、感染した際の症状、予防法、感染しないための普段からの心がけなどについて説明しました。

インフルエンザは、例年11月下旬から12月上旬にかけて感染が拡大。A型に次いでB型のピークが訪れ、ゴールデンウィークごろに終息しています。症状は頭痛や発熱、悪寒、倦怠感などが現れます。風邪との違いは、急激な全身症状として発症し、発熱は38度以上の高熱、全身の倦怠感や食欲不振、関節痛、筋肉痛になります。

インフルエンザウイルスは咳やくしゃみで周辺に飛び散り、そのウイルスがのどや気管支に感染すると1～3日間の潜伏期で増殖、発症します。感染の経路は咳やくしゃみによる飛沫感染と、インフルエンザウイルスがついた手すりやドアノブに触ることによって感染する接触感染が主です。

インフルエンザは、高齢者では死亡例もあり、肺炎や脳症などの重篤な合併症を起こすこともあり、施設や病院で流行数と患者や入所者、職員も巻き込んで短期間に多くの発症者も出るケースもあります。

インフルエンザの多くは、手に付着したウイルスが鼻や口、目から体内に入る接触感染が主になり、その

防止のためには手洗いなどの徹底した手指消毒が有効になります。最後に感染を防ぐためには、予防接種を受けること、正しい知識を身につけること、手指衛星で予防、かかったと思ったらすぐ相談、が必要と「強調しました。」

平成30年11月22日

